

最近知った言葉 「公正世界動機」について

札幌市医師会
北海道立精神保健福祉センター

岡崎 大介

はじめまして。私は、精神保健福祉センターという北海道の機関に所属している精神科医です。ざっくりと、北海道民の心の健康の維持・増進にかかわる仕事をしている者です。新型コロナウイルス感染症が拡大してきた現状に対し、クラスター発生医療・福祉施設の心のケア事業を行っています。この事業で各施設に関わり、お話を伺う中では、差別・偏見やそれに基づく誹謗中傷を受けているとの話をよく耳にします。「未感染看護師の家族が出勤しないように指示された」「家族が自営業だが、取引を中止された」「子どもがクラスメートにいじめられた」などです。このような現象はなぜ起こってしまうのかを調べる中で、「公正世界動機」という言葉を知りました。

海外に比べて日本では、新型コロナウイルス感染症への罹患が「本人のせいだと思う」という考えを持つ者が多いようです。だったら、感染を恐れて外出を控えたり、人との対面での交流を避けたりすればよいはずですが、それだけでなく口に出して攻撃してしまうことがあるというわけです。このように、自業自得と思う気持ちから、さらに排斥、攻撃してしまう現象を「公正世界動機」と心理学では言っているそうです。

公正世界動機の背景には、「よいことをしている人は報いられる」「悪いことをした人は罰せられる」という人々が望む公正さがこの世の中に実現しているはずだという「公正世界観」があります。しかし、世の中は必ずしも公正ではなく、品行方正にしても事故に遭うこともあるし、体調に気を払っていても大病にかかることもあります。そうしたときに公正世界観が脅かされてしまい、公正世界動機がはたらいて「世界は公正だ」という証拠を取り戻そうとして、被害に遭った人に対して、「正しい生活をしていなかったからだ」と責めてしまうということです。これは、性暴力の被害者に対する「夜遅くに無防備に出かけるから」などと責めてしまうことも同様です。

つまり日本では、この公正世界観を信じる程度が海外に比べて高いために、新型コロナウイルス感染症への罹患が「本人のせいだと思う」という者が多くなっていると考えられます。これは、日本が「頑張ったことは報われる」ことを信じようとする社会だし、少ない投資やエネルギーで大きな利益を得ることをずるいと考えるところもあります。このよう

な風土の中で、感染者（感染予防行動をとらなかったはずの者⇒妄想かもしれない）は「我慢の足りない人」であり、「我慢している自分は感染するはずがない」という安心につながる、ということのようです。

つまり、差別・偏見は、言わずもがな感染への不安から生まれる、というわけです。なので、その不安に対応することが、差別・偏見の解消につながります。自身が差別的行動を取らないためには、不安は誰にでもあること、被害者を攻撃する気持ちは安心を求める自身の心の問題であることを知り、また被害者に対する行動は排斥や敵意ではなく、共感と支援であることを再確認することです。また、偏見をもつ者や誹謗中傷を行う者と関わる場合は、「それはいけないことだ」と理屈で説得しても反発を生むだけなので、その根底にある不安にアプローチをして、「今後、自分が感染するのではないかと心配なのですね」などと受け止め、その心配が解消することを望んでいる、と伝えることが良いのだと思われます。

私の妻は中学校の教員なのですが、彼女が「私はこんなに頑張っているのにちっとも報われない」と漏らすことがあるのは、この公正世界観に基づく発言だったのかな、と感じました。人間は誰しも、得意なこと、苦手なことがあって、どんなに頑張っても難しいことはあるし、それ自体が個性なのだから、と私は考えるのだけれども、生徒さんたちに学習をさせるため、根気強く課題に取り組む力を育てるためには、「頑張ったことは報われる」を信じ込ませていることもあって、彼女自身も私に比べるとこの観念が強い部分があるのでしょうか。

日本人の生真面目さの根底の一つが、この公正世界観なのであって、それ自体は決して悪いことではないわけですが、それが行き過ぎて公正世界動機として他者への攻撃につながることはとても残念なことです。新型コロナウイルス感染症の脅威は、皆が感じていることです。その脅威への恐怖・不安を皆が分かち合い、互いに助け合う社会になっていけるよう、北海道における精神保健担当者として尽力しようと思います。

参考) 北村英哉 差別や偏見はなぜ起こるのか? 保健師
ジャーナル 77巻1号、12-18 2021年